

## 「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

# 会報

NO. 81

2022.5.31 発行

編集責任者：河地 清

[Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp](mailto:Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp)

## 第 81 回 「ふるさと春日井学」研究フォーラム

テーマ：『地域活性化を考える』

いろいろな地域づくりの実践例④

－「おてらおやつクラブ」の取り組み－

講師：野田 芳樹氏

(認定 NPO おてらおやつクラブ理事・林昌寺副住職)

今回のテーマは、「地域活性化を考える」－いろいろな地域づくりの実践例④－「おてらおやつクラブ」の取り組み－で設定しました。

「あなたにできること、こどもたちの笑顔のため、できることからはじめてみませんか？  
おすそわけを送る、食品や日用品などを寄贈いただける方は、おてらおやつクラブ事務局  
までご送付ください。生活に困窮する家庭や団体へおすそわけいたします。」(認定 NPO 法  
人おてらおやつクラブパンフレットより) をコンセプトとして子どもの貧困問題解決に  
取り組んでおられる「おてらおやつクラブ」の活動は地域を元気にする地域創生活動でも  
あります。SDGs(持続可能な開発計画)の目標にも通ずる創造的な活動でもあります。活動  
の趣旨、内容を紹介して頂きました。



講演：野田芳樹氏



全国のお寺の おそなえ  
仏さまからの おさがり  
こどもたちに おすそわけ

認定NPO法人  
おてらおやつクラブ

「NPO 法人おてらおやつクラブ」公式マーク



会場風景

## 講演の概要（当日の講演と講演資料を基に編集作成いたしました。）

### ・野田芳樹氏の自己紹介

平成 2 年 春日井市に生まれる。生家は臨済宗寺院「林昌寺」

平成 24 年 東京・上智大学文学部国文学科卒業

平成 24～26 年 名古屋市・徳源寺専門道場にて修行

平成 27 年 林昌寺副住職に就任、趣味は書道、読書。

認定 NPO 法人おてらおやつクラブ理事。組織運営のマネジメントをしながら、主に広報の業務を担当。

### ・おてらおやつクラブが立ち上がった背景

国内の子どもの貧困問題の解決を目指す認定 NPO 法人おてらおやつクラブ。お寺の「おそなえ」を「おさがり」として困りごとを抱えるひとり親家庭へと「おすそわけ」し、「たよってうれしい、たよられてうれしい。」そんな共助社会の創出を目指す団体です。

中村元（哲学者・仏教学者）先生の思想を、私自身は大切にしています。「宗教による社会活動の要請されることが、今日ほど切実な時代はない。それにも拘わらず、かかる活動は決して十分に具現されていない。仏教では慈悲理想は説くけれども、それをいかに実践すべきか、ということについて、仏教教団あるいは仏教学は適切な指示を与えてくれない。これは今日の仏教の致命的な弱点である・・・」（『慈悲の精神』）

論より実践によって目の前の具体的課題を解決してゆくことであると考えています。国内の子供の貧困問題の解決を目指す認定 NPO 法人を設立しました。

「おそなえ」「おさがり」「おすそわけ」など消費しきれず、時に無駄にしてしまうようなことがないような仕組みです。禅宗で食事を頂く前にお唱えする「食事五観文」（しょくじごかんもん）の第一に掲げられる「一つには切の多少を計り彼の来処を量る」にも通ずると考えます。

### ・日本国内の貧困とはどういうものか？

日本の貧困の多くは相対的貧困の状態であって、飢餓状態にある絶対的貧困ではありませんが「・食事が三食取れていない・高、大へ進学ができない・旅行に出かけられない」等々十分に健康で文化的であるとは言えない状態があります。2019 年国民生活基盤調査（厚生労働省）によれば、子供の貧困は、1/7 人 280 万人、1 人親家庭の貧困は、48.1%を占めています。

いくつかの事例が話された。事例その 1「おてらおやつクラブを知ってから 2 日もたたないうちにおすそわけが届きました。嬉しくてたまりません。私たちは夫の DV から着の身着のまま逃げてきました。なので、家具家電、私物や大事なものはおいてきました。経済的 DV もあり生活費をもらえず貯金からだしていたので貯金もほとんどないです。最近は節約にも限界があり、「息を吸うだけお金がかかるから生きている意味はないのでは」「日用品も粗悪な安物品に全て変えても子供に笑顔で物を買ってあげられないくらい赤字でどうしよ

う」と考えていました。しかし、こちらのおやつクラブさんを知り、おすそわけを届けてもらえたことにより涙が止まりませんでした。私、生きていていいんだ。ありがとうございます。今、求職中のためお米や食べ物は本当に助かります。息子も私も明日また生きていていいんだ、と明日への希望になりました。 愛媛県の 30 代のお母さん/男児 1 人」(認定 NPO 法人おてらおやつクラブ発行「声」より)

事例その 2 「2013 年大阪の母子餓死事件ということが起こりました。その時の母親の子に宛てた手紙がなんともやるせない。「最後におなかいっぱい食べさせてあげたかった。ごめんね。」28 才の母、3 才の子は、電気は止められ、冷蔵庫の中の食料は食塩だけの状態であった。社会からの孤立状態を救えなかった事例です。

#### ・具体的な活動の仕組みと今後の想い

この活動は、松島靖朗(奈良県・浄土宗安養寺住職)氏の発案から始まりました。「もったいない」を「ありがとう」に変えるという考え方でした。2014 年 1 月から「おてらおやつクラブ」として発足し、2017 年に NPO 法人に。2020 年には奈良県から認定 NPO 法人の認可を受けました。

お寺と社会の新しい関係を構築してゆくことが求められている中で、今後の課題としては、「人と人との繋がり、絆のあり方、お寺の社会的立ち位置＝後方支援」などが持続的な支援になるような発想が必要である。直接支援となる行政の支援制度に繋がれない家庭に直接「おすそわけ」支援ができるように仕組みを整備してゆく必要があります。

#### ・当活動への支援方法・意義

活動の根っこにある精神は、「共に生きる(おたがいさま)」「慈悲の実践(他者の喜び苦しみを自分に)」「共助が当たり前にある社会」です。「たよってうれしい、たよられてうれしい」支援させていただいてありがとうという声を沢山頂いており、その都度私自身がうれしくなりました。そこにこの活動の社会的存在意義があると思っています。

#### ・結びとして-この活動をつうじて学んだこと-

この活動を通じて野田氏自身が多くのことを学ぶことができたとして以下ことを示されました。

- ① 利他のこころの受け皿としての役割-責任を自覚することができた-
- ② 自分自身が活動を通じて勇気や元気をもらっている。
- ③ 「支援する」「支援される」という精神が大切である。
- ④ 身の丈で出来ることを粛々と続けることが大切である。

「の活動で改善されたことは何か？」(アンケート調査)によれば、経済的に良くなったを、精神的によくなった(95.6%)が圧倒的に上回っていたことを報告され、講演の結びとされました。

#### ・「子どもの貧困問題」支援の現場での声

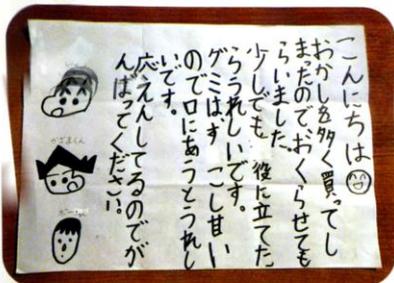
(認定 NPO 法人おてらおやつクラブ『てばなす第 5 号 2021.7』より)

## お寺さまの声



一般支援者からジャガイモが届いたので、お寺からのおすそわけと合わせてお届けしました。コロナ禍で法要が縮小、中止となる中、お寺もお供えが減っていますが、一般支援者からの寄付やお檀家から継続的に「おやつクラブ」へのおすそわけをいただいております、結果的に支援先へは今まで以上のお届けが来ているのは大変有難いことと思っております。(北海道 住職)

コロナ禍で思うようにならない子どもたちや、収入減のご家庭に、「少しだけでも、応援しています！」の気持ちを込めておすそわけを詰めています。先日は子どもたちからのお礼の色紙に「お寺の仕事がんばってください」「お菓子や愛情をありがとう」と書かれていて、気持ちが伝わっていることに感激しました。(埼玉県 坊主)



## お母さんたちの声



子供のほんの少しのおやつも買ってあげられなくて…私も食べたくて…イライラしてしまったり…当たってしまったり…情けなくなったり…部屋に引きこもりがちで、反抗期であまり話さなくなって来た息子と二人で段ボールの中見て笑顔になりました。息子がグミ食べて「うまい！」ってつかの間の笑顔が見れて、涙が出るほど嬉しかったです。「ありがたいね」ってさっそく一緒にいただきました。生かされていることを感じました。(40代お母さん 男児1人)

沢山のおすそわけありがとうございます。子供の為のおやつ支援だけかと思っていたら、ファンデーションが入っていてとても嬉しくなりました。離婚以来、自分に構うことなく、化粧するのも参観日くらい…その時すら化粧品の隅を爪楊枝でほじくりながら使っている状態で…新品の化粧品の箱を見て涙が出てきました。ありがとうございます。がんばる活力をいただきました！(40代お母さん 男児1人 女児3人)

## いろいろな声

### 支援者の声



早いものでもう5月ですね。コロナウイルスはなかなか収束せず我慢の日々が続きますが、今しかできない事を楽しみながら乗り越えていきましょう。私ができる事は少ないですが少しでもお役に立てれば嬉しいです。

### 団体さまの声



ひと言メッセージに、感動いたしました。お氣遣いにご大変感謝いたします。箱を開けて色々なものが隙間なく詰め込まれていて、宝箱みたいだと思いました。応援のご家庭に配らせていただきます(^^)ありがとうございます！(子ども食堂)

失職しておられる方、子どもが小学校に入学するのに雇止めになる方、思うように食事が取れず足りない分は水を飲んでお腹を膨らませる家庭。親御さんは本当に食べさせる事に心を砕いています。それと同時に、心の不安をとて強く抱えておられる方が増えました。そんな中でも、時折「おすそわけ」が送られてくると、一人で支えているのではないと安堵します。今日もお母さん達に『1人ではないよ』と、伝えることが出来ます。(ひとり親家庭支援団体)



いつも満腹ではないのに「美味しいけど、お腹いっぱいだから残していい？ママ、食べてくれる？」と、息子の分しか用意しないわたしに少しでも食べてもらおうとする息子から徐々に気持ちの良い「おかわり！」が聞けました。6歳の子供にこんなに遠慮させてしまう生活で本当に母親として苦しいのに、とても優しいメッセージまでくださり救われる思いです。感謝しありません。(30代お母さん 男児1人)

# お寺の供え物 支援必要な家庭に

奈良の認定NPO法人

全国で紹介 あす、春日井から

寺院の供え物を支援が必要な家庭などに届ける認定NPO法人「おてらおやつ



会場となる本堂で全国巡回展への参加を呼びかける野田さん。春日井市林島町の林昌寺で

クラブ」(奈良県)が、取り組みを紹介する初の全国巡回展を、二十五日に春日井市林島町の林昌寺から始める。県内では岡崎、名古屋両市でも予定し、活動説明会と物資の箱詰めワークショップを開き、食品や書籍類などの寄付も募る。同法人の活動には現在、全国千八百以上の寺院が参加。檀家などから募った食品や日用品を、子ども食堂やフードバンクなどの支援団体を通じて送っている。支援を受けている子どもは約二万二千人以上という。

巡回展は貧困問題への理解を深め、できることを考えてもらうと企画した。来年三月まで全国十二カ所の寺院や関係施設で、事前に参加者を募って活動の仕

中日新聞 (2022.4.24)

岡崎市の明願寺、十月に名古屋市昭和区の教西寺で予定する。参加希望は申し込みフォームQRコードから。林昌寺での巡回展の詳細は、野田さん080-4230-9711へ。(小林大晃)

(編集責任: 河地 清)

## 「地域活性化」は、地域の「草の根活動」が原動力！

今回の実践例を聴いて地域活性化の原動力は、その地域、地域で行われる「草の根」の活動であることがわかりました。身近に存在するリアルな問題・課題を「どうしたら解決できるだろうか」「なんとかしなければ」と意識した人々によって創意と工夫による取り組みが行われているということです。そこには、まず学術的な理論ありきの話ではありません。あるのは、目の前の課題・問題点をどのように解決して行くのか、どうしたら解決できるのかという、人々の内発的「情熱」と「行動力」から始まるものであることが解ります。「地域活性化」は、「論より実践」の営みであることも理解できます。従来の「地域活性化」は、経済的活性化＝生産と消費に特化して進められてきたことも事実です。経済的に豊かになれば社会も文化も豊かになってゆくと、意識するとしないとにかかわらず今日までそう思ってきました。「エコノミックアニマル」と言われた時代もありました。今日は、再び夢よもう一度と同じモデルで前へ行こうとはしていません。「新資本主義」なる発想が登場してきましたが、今までの反省点・問題点を克服する施策であって欲しいと願っています。特に国を挙げての地方創生政策は、地域活性化の成否の鍵を握っています。冒頭で述べたように、地域が活性化する鍵は、「地域・地元・ふるさと」と言われる暮らしをしている人々が原点です。その足元の課題・問題点に「情熱」と「行動力」で真摯に取り組んでいる「団体」や「組織」が十二分に力が発揮できる環境を創ることで、従来の補助金の政策ではなく、十分な助成金を国、自治体は、支給してゆくことだと思います。ふるさと納税政策（本来の）なども有効に使い、モチベーションを最大限にして行くことだと考えます。そうすることによって、「活動」しやすい環境を醸成し地域の活性化を促進してゆくことができるのではないかと考えます。

経済、文化、社会を創意と工夫によって生き活きとさせ、地域社会を活性化に導いている市民活動団体、NPO 団体などの組織への支援こそが実効性ある施策であると考えます。

「81 回フォーラム「おてらおやつクラブ」（子どもの貧困問題）の取り組み」を聴講してその感を強くしました。「地域活性化」は、人の情熱と足元（地元・ふるさと）の中から発せられる創意・工夫そして思考錯誤の中から創りだされてゆくものであることを再確認することができました。その情熱はどこから湧き出てくるのかを考えたとき、暮らしている土地に対する愛着とそこに暮らす人たちへの愛と情熱であることもよく理解できました。「もうこの地域は限界だ！だめだ！」と嘆く前に、地域のもつ人、自然、文化、産業の力に気付きそれを引き出してゆく創造力こそ「地域活性化」の原動力です。その力は地方に根ざす「草の根」の力だと思います。

（文責：河地 清）

かすがい市民活動情報サイト：<http://kasugai.genki365.net/>

ふるさと春日井学

検索

